

目 次

1. 「会報」第4号の発行に当たって	今井 哲二	2頁
2. 齋藤 哲也 新幹事の横顔(坪井 記・齋藤 補足)		3
3. 私とレーダ	帯谷 達郎 S.42 年卒	4
4. 私の原点にあるもの(その1)	坪井 孝光 S.36 年卒	8
5. 今井研卒業40年	橋本 潔 S.39 年卒	10

会 報 第4号

「今井研・卒研究生の会」 2004.3.31

1. 「会報」第4号の発行に当たって

今 井 哲 二

会員の皆さんがこの「会報」に寄せる期待と積極的なご協力、そして坪井幹事長の並々ならぬご努力により、本号もバラエティに富んだものとなった。皆さんが卒研を経て社会に出られてから、三十数年～四十数年の時が流れた。夜毎に朝を重ねる日々の流れは誰にも一様に訪れてくるが、その中で時代の波は激しく揺り動いてきた。皆さんを含め我々の世代はこの激動期に身を置き、夫々がそれぞれの道を懸命に歩んできた。そんなことを改めて感じさせる「会報第4号」である。

「時の流れ」ということについて、近年感ずるところがあった。鈴木(威)・高井・帯谷・安原さんらの先生でもあった武蔵工大の元教授・中村新太郎先生のことである。一般的には殆ど知られていない方であるが、かの有名な八木・宇田アンテナで知られる八木秀次・宇田新太郎 両碩学の最も近くで共に仕事をした方である。八木先生が武蔵工大の学長になられたとき、電気通信研究所で私の上司であった中村先生が八木先生に請われて武蔵工大の教授になられた。中村先生は八木・宇田 両巨星の最期を看取ったといっても過言ではなく、両巨星の知られざる葛藤などを密かに私共にも話された。この中村先生が93歳で亡くなられて満2年半が経った。先生は電子工学の教授であっただけではなく、臨済宗の「禅」について苦行をされ、この分野では極めて珍しい「在家の師」としての資格を持たれた稀有な存在であった。先生は生前、多数の自著を含め万巻の書籍に囲まれ、最期のときまで鮮明な意識の許で何等かの執筆活動を続けておられた。先生没後、これらの書の殆どは何処かに処分された。処分するに忍びない20～30冊ほどを私が引き取り、その内の半分近くを最寄の図書館に寄贈した(残りは未だ私の手元にある)。

そんなこともあり、「会報第3号」からの半年の間に私が注いだ努力の最たるものが、ここに掲げる私自身の『学術論文・著述類リスト』の作成であった。昨年は平成15年で私も満77歳という節目の年であったので、昭和20年代からの私の研究論文・解説論文など300件近くの学術資料を網羅して、抄録リスト冊子のかたちに纏めた。A4サイズ・ハードカバーではあるが、挿し込み型の簡易製本で30部ほど作成し、その大部分は田舎の出身校などを含めた身のまわりの図書館に寄贈した。こうして配布したところで、殆ど誰の目にも触れることは無いかも知れないが、生きた「証し」になればとの期待を多少は込めている。

卒研時の皆さんの協力による少なからぬ研究成果をも包含するリスト作成の顛末について、ここに紹介した。心からなる感謝の意と共に。



2. 齋藤 哲也 新幹事の横顔(坪井 記・齋藤 補足)

理科大の物理学科を S.41 年に卒業してから 2 年 1 ヶ月間、昭和薬科大学で物理教室の助手を務めていたとき、NEC や東芝やソニーとかを紹介するよと今井哲二先生にいわれて、S.43 年ソニーを受けてみました。その当時はソニー(株)を全く分かっていなかったのですが、未知のソニーへチャレンジしてみようと厚木工場での一ヶ月間の実習を経た後、同社へ入社試験で入りました。これが今日までの私のベースになっています。

半導体材料の主流であるシリコンの気相成長法改善に 2 年半位携わってから大崎工場のテレビ事業部に転勤になり高圧部品の設計を 10 年間 担当しました。その後再び厚木へ戻り放送局向け一体型ベータカムカメラの VTR の一部を担当、最後は VAIO ノートパソコンの製造工場で購入部品の試作購買部長を担当し、2 年前にソニーを早期退職しました。

その後縁があって、長野県にある金属プレス会社から声がかかり、2 年間品質管理を中心に働いてきました。ソニーTV 事業部時代に工程指導のため台湾で仕事をしたときの片言の北京語が再び役に立ち、上海に工場進出するときの土地探し、現地人の採用面接等の他、生産管理や品質管理のあり方などの指導をしてきました。

振り返れば何かの問題解決をするとき、アルバムに記してある「研究のあり方」・「データ解析」・「論文のまとめ(報告書作成、プレゼンテーション資料作成)」等々がその基盤になったと今思います。

卒業研究の一年間 於 電気通信研究所

第二回懇親会(2003.7.25)の新幹事挨拶では、ご自身が当日持参された右掲のアルバムの記入されていたメモのお披露目があり、メモを読みながら当時は回想されておりました。下記に写真とそのメモをご紹介します(坪井 転記)。

『 S.40 年 3 月より始めた卒研も S.41 年 3 月には終わった。この間、振り返って見ると長かった様な、短かった様なというところ。

外研(外部卒業研究)という特殊な立場で 4 月からスタートした。もちろん自ら進んで。意欲は十分有った。がしかし、自信などは全く持っていなかったのだから今考えると無茶をしたと思う。

クラブ(音楽)にばかり憂き身をやつして勉強すらやっていたのだから、ましてや研究など出来るはずが無かった。3 ヶ月位経った頃からやる気を失いつつあった。自分が今何をやっているのかを失いがちだった。それでも 12 月、1 月頃になって、卒論としてまとめる段階へ来て、あれもしておけばよかった、これもしておけば良かったなどと悔やんだが後の祭りだ。

そんな訳で気持ちの上ではこの一年間が長く、研究の上では短かった。一つのテーマについて調べるのにはかなりの探究心がなければならぬ。自分なりの研究は出来なかったが、本の読み方、研究とはどういうものか、その方法、データの解析法、論文のまとめ方など、色々学び取るところがあった。先生(今井博士)と一対一でご指導されたのは心強いものがあった。
決して無駄ではなかった一年間である。』

